

専門医から 若手ドクターへの提言

川崎医療福祉大学医療福祉学部子ども医療福祉学科 特任教授

OUCHI Kazunobu 尾内一信

CAREER

はじめに

私は、2021年3月に川崎医科大学を定年で退任して、現在、川崎医療福祉大学子ども医療福祉学科に異動しました。私の山口大学入学以降のキャリアを振り返りますと、折に触れて人生を導く大切な恩人達に出会っていました。恩人達の表現は多少異なってはいましたが、共通していたことは、常に上向きで前向きな姿勢でした。知らず知らずのうちに私も上向きで前向きになっていました。もともと私は、学生時代から、大学で教育職として働こうと思ったことも、研究者として活躍しようと思ったことも一度もありませんでした。大学の偉い先生達の教えを参考にしながら、実家の近く(姫路)でのんびり開業できればいいなと思っていました。人との出会いは不思議なものです。恩人のおかげで、知らず知らずのうちに、小児科の実地臨床家としてだけではなく、研究者や教育者として豊かな人生経験を積むことができました。私の経験は、若手ドクターの参考になるかわかりませんが、何かのときに思い出していただければと思います。

医学部卒業まで

私は、1974年に山口大学医学部に入学しました。全国的に学生紛争も収まり、当時はそのような医学生も多かったと思いますが、あまり勉学に熱心ではなく、山口市と宇部市で非常にのびのびと学生生活を過ごしました。当時は国家試験もそれほど厳しくなく、医学部の各教科の試験を留年しないように通れば十分と考えていました。もちろん同級生のなかでも10名程度は、将来教育者や研究者になろうと勉学に励んでいる人もいましたが、自分たちのグループは決して良い成績を取ろうとか、将来大学教授や優れた研究者になろうとは全く考えていませんでした。親も実家の近くで開業してくれれば良いと思っていたようです。大学5年生の夏休みに、まじめな同級生白井幹康君(現・国立循環器病研究センター客員研究員)が、一緒に1週間の病院見学に行こうと誘ってくれました。そのときにお世話になったのが、後の上司となる済生会下関総合病院小児科の金原洋治先生でした。金原先生には病院見学中に非常にお世話になり、小児科医としていつも楽しく前向きに働くことを身をもって体験し、将来